3　大学教育のジェンダー効果

相原 総一郎
（大阪薫英女子短期大学）

はじめに

現在，日本の大学進学率は男性 53%，女性 50%である[1]。18 歳人口の減少期に入り，個々の大学は教育内容の改善や学生募集の展開などにより学生確保の努力をしている。日本の大学は生涯学習社会への適応を求められている[2]。一方，アメリカの大学進学率は，男性 61%，女性 72%である[3]。アメリカでは 1970 年代に女性の進学者数が男性を上回って以降，男女差を拡大させながら，全体として進学者数はなだらかに増加している。この傾向は，今後も継続すると予測されている[4]。

本稿では，日米の学生調査(JCSS2005 と CSS2004)から大学教育のジェンダー効果について検討する。日米とも高校卒業者の半数は，大学や短期大学に進学している。進学率だけをみれば，もはや大学進学に性差の規定力は働いていないようである。しかし，実際は，高等教育システムには女性専用軌道(天野 1986)やジェンダー・トラック(中西 1998)と呼ばれる性別構造がある。それは，たとえば専攻する専門分野の男女の構成比率の偏りである。女子学生は，人文科学，家政，教育，芸術の分野に多い。一方，社会科学，理学，工学，農学の分野には少ない[5]。天野正子(1986)によれば，女子学生にとって大学教育の伝統的効果は，知識の内容において「職業的」であるより「教養的」であり，知識の働きにおいて「地位達成的」であるより「地位象徴的」である。さらに，日本の女子短期大学は，４年制大学への編入の経路が狭く，性別分業の再生産装置として機能していると指摘されている[6]。アメリカにも同じように専門分野に男女の構成比率の偏りがある。ただし，アメリカでは，社会科学やビジネスの分野に男女の偏りはない[7]。また，アメリカの短期高等教育機関は，ほとんどが共学であり，大きな働きの一つとして学生を４年制大学に編入させている。

学生調査では，アメリカの 2004 年版の調査項目を基に日本側の調査項目を作成している。調査項目に互換性はあるが，両者の比較には，日米の社会や大学制度，そして訳語の微妙な意味の違いを考慮する必要がある。また，調査に参加した学生にも標本として偏りがある。まず，短期大学の学生は含まれていない。そして，学年や専門分野，男女の構成比率にも偏りがある。そうした標本の偏りに注意した上で，集計表から，日米の学生の意識と行動にみられる性差を検討する。具体的には，学生のプロフィール，価値意識，自己評価，葛藤と課外活動，学習行動，そして特別プログラムの履修について，性差を大学教育のジ

ェンダー効果としてとらえ，その実態と大学教育の改善について検討する。

１．プロフィール

２つの学生調査に参加した学生は，選抜度の高い４年制大学の学生である。まず，日本の調査に参加した 3,961 人は，設置者別に国立大学は旧帝大の学生であり，私立大学は最も選抜度の高い有名大学とそれほど選抜的でない４年制大学の学生である。つぎに，アメリカの調査からは公立総合大学の学生 1,333 人を比較群に選んだ。公立総合大学は，アメリカの大学分類で研究大学に類型される，公立大学で最も選抜度の高い大学群である。

この他，調査に参加した学生のプロフィールは以下のようである（表○－１）。

①学年

日本は，２年生が半数以上である(54%)。設置者別では，国立は２年生が過半数であり(78%と 68%)，私立は１年生（34%と 33%）と２年生（39%と 34%）で過半数を占める。一方，アメリカの学生は，４年生が過半数である(71%)。アメリカでは，入学時と１年次の終了時にも調査をしている。そして，学生調査はその追跡調査になっている。

②専門分野

日本は設置者別の偏りが一目瞭然である。私立大学には，理学，工学など理系を専攻する学生がほとんどいない。それは，調査に協力をいただけた大学教員の制約による。また，医学には薬学や看護も含む。それで，国立大学で医学を専攻する女子学生の割合が多くなっている(16%)。一方，アメリカの専門分野は，その他が４割近くを占めている。日本の専門分野にないビジネスなどの領域に多くの学生が在籍しているからである。

③高校での成績

日米とも高校での成績は上位であった学生が最も多い(37%と 55%)。男女別では，日米とも，女性の方が成績はよい。

④大学での成績

日本は大学での成績は中位である学生が最も多い(34%)。一方，アメリカは大学での成績は中の上である学生が最も多い(37%)。男女別では，日米とも女性の方が成績はよい。とくにアメリカでは，女子学生の成績は中の上が最も多い(40%)。それは，全体の成績で中の上をモードに押し上げている。

⑤進学アスピレーション

日本は学士程度まで進学を考える学生が最も多い(66%)。設置者別では国立大学の学生は修士程度まで進学を考える学生が多い(54%と 36%)。とくに国立大学の男子学生は過半数が大学院修士課程への進学を希望している。それは，調査に参加した国立大学の学生は，専門分野が，男子は工学(36%)，女子は薬学(16%)というように理系が多いからだと推測される。一方，アメリカは学士程度まで進学を考える学生が最も多い(38%)。しかし，大学院進学を志望する学生も多い。修士程度まで進学を考える学生は学士程度までとほとん

ど同じである(37%)。また，博士程度まで希望する学生も多い(21%)。男女別では，進学アスピレーションはむしろ女性の方が高い。女子学生は，修士程度まで希望する学生が最も多く(41%)，博士程度まで希望する学生にも男女差はない(21%)。アメリカで多くの学生が大学院進学を志望するのは，ちょうど日本の理系学生のように，卒業後に希望の職に就くためには大学院修了が要件になっているからだと推測される。

表 2.3.1　学生のプロフィール

		日本 (JCSS2005)					アメリカ (CSS2004)		
			国立大学		私立大学		公立総合大学		
			男性	女性	男性	女性		男性	女性
		(3,961)	(1,233)	(472)	(1,131)	(1,062)	(1,333)	(491)	(842)
学年[1]	1年生	21%	6%	2%	34%	33%	1%	2%	1%
	2年生	54%	78%	68%	39%	34%	6%	5%	6%
	3年生	17%	11%	23%	18%	21%	15%	17%	14%
	4年生	4%	3%	5%	7%	11%	71%	70%	72%
	5年生以上	2%	2%	4%	3%	1%	7%	6%	8%
専門分野[2]	文学	10%	4%	14%	10%	14%	10%	9%	11%
	法学	6%	8%	10%	3%	4%	0%	0%	0%
	経済学	33%	13%	11%	62%	36%	8%	8%	8%
	社会科学	12%	1%	7%	15%	26%			
	理学	5%	13%	4%	1%	0%	3%	4%	2%
	工学	13%	36%	6%	2%	1%	9%	15%	5%
	農学(農芸化学を含む)	3%	6%	8%	0%	0%	3%	4%	2%
	生物学	1%	3%	1%	0%	0%	7%	7%	7%
	医学(薬学・保健を含む)	5%	9%	16%	0%	0%	5%	2%	7%
	教育学	7%	2%	5%	6%	13%	10%	4%	14%
	心理学	4%	2%	15%	2%	4%	5%	2%	7%
	その他	2%	3%	4%	1%	3%	41%	45%	39%
高校での成績[3]	上位 (A,A+,A-)	37%	52%	56%	23%	26%	55%	49%	60%
	中の上 (B+)	29%	26%	32%	26%	35%	20%	21%	20%
	中位 (B)	15%	9%	7%	20%	21%	18%	20%	16%
	中の下 (B-)	9%	6%	3%	12%	10%	5%	6%	4%
	下位(C+,C)	8%	5%	1%	17%	6%	3%	4%	2%
	その他(D)	2%	1%	1%	2%	3%	0%	0%	0%
大学での成績[4]	上位 (A)	5%	5%	5%	4%	6%	16%	14%	18%
	中の上 (A-,B+)	19%	19%	24%	16%	21%	37%	31%	40%
	中位 (B)	34%	35%	39%	31%	34%	28%	33%	26%
	中の下 (B-,C+)	16%	17%	16%	17%	13%	14%	18%	12%
	下位(C)	12%	16%	6%	16%	5%	4%	4%	3%
	その他(C-以下)	15%	9%	10%	17%	22%	0%	0%	0%
進学アスピレーション[5]	短大学士程度	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	学士程度	66%	29%	56%	88%	90%	38%	44%	35%
	修士程度	25%	54%	36%	7%	7%	37%	30%	41%
	博士程度	7%	16%	8%	3%	2%	21%	21%	21%
	その他	2%	2%	1%	2%	2%	4%	5%	4%

注) 四捨五入のため数値は100%にならない。また、日本 (JCSS2005) の設置者別性別の人数合計は欠損サンプル(N=63)があるため全体と一致しない。

注1) 学年は入学年度の設問(問1)より。5年生以上には大学院生や科目等履修生を含む。

注2) 専門分野は問25より。JCSS2005では、その他に芸術、情報科学などをまとめた。CSS2004では、文学に英語、歴史、美術など人文諸科学をまとめた。また、社会科学に経済学をまとめた。そして、その他にビジネス、職業技術教育、情報科学などをまとめた。

注3) 高校での成績は日本は問5より。アメリカの高校での成績は新入生調査(CIRP2004)より。サンプル数は、それぞれ30,340：32,499：62,839。「A-」を「中の上」として処理した。

注4) 大学での成績は問11より。

注5) 進学アスピレーションは問3より。CSS2004の博士には、Ph.D.の他、Ed.D.やM.D.、B.D.などを含む。

表 2.3.2　学生の価値意識

	日本（JCSS2005）							アメリカ（CSS2004）			
		国立大学			私立大学			公立総合大学			
		男性	女性	差	男性	女性	差		男性	女性	差
生きたい人生を送る	82%	77%	82%	5	81%	88%	7	ー	ー	ー	ー
友人関係を大切にする	76%	67%	77%	10	75%	88%	13	ー	ー	ー	ー
家族を養う	56%	62%	38%	-23	71%	41%	-30	81%	79%	82%	3
成熟した人生観をもつ	54%	46%	59%	13	53%	60%	7	47%	48%	46%	-2
困っている人に役立つ	41%	36%	41%	5	43%	46%	3	71%	64%	74%	10
専攻分野で認められる	40%	48%	33%	-15	39%	34%	-5	51%	51%	50%	-1
お金持ちになる	34%	30%	22%	-8	44%	35%	-9	61%	66%	59%	-7
会社などで出世する	31%	29%	16%	-13	44%	26%	-18	42%	51%	37%	-14
商売で成功する	22%	17%	7%	-10	35%	19%	-16	33%	44%	27%	-17
地域社会の問題を解決	14%	10%	13%	3	15%	16%	1	24%	20%	26%	6
政治動向から離れない	14%	12%	11%	-1	17%	12%	-5	45%	46%	44%	-2

注）問19より。日本は「とても重要」、アメリカは「最も重要」と「大変に重要」と答えた学生の割合。
四捨五入のため誤差がある。アメリカ側の「ー」は、対応する調査項目がないことを示す。

２．価値アイデンティティ

日本の学生には，「生きたい人生を送る」(82%)と「友人関係を大切にする」(76%)が最も重要な価値である。一方，アメリカの学生には，「家族を養う」(81%)と「困っている人に役立つ」(71%)が最も重要な価値である。日本の価値観は日本独自の項目でアメリカでは調査されていない。しかし，日米で学生の価値観に違いがあるのかもしれない（表○－２）。

さらに性差について，日米の学生の価値意識を項目ごとにみると，そこに共通する性的価値観の傾向が浮かび上がる。それらを，男子学生は「地位達成的価値アイデンティティ」，女子学生は「人間関係的価値アイデンティティ」とする。

まず，日米の男子学生が重要だと答えた項目は，「専攻分野で認められる」「お金持ちになる」「会社などで出世する」「商売で成功する」「政治動向から離れない」である。どれも地位達成に関連する項目である。男子学生は，政治や経済などに関心をもち，社会的成功が期待される価値意識を社会化している。つぎに，日米の女子学生が重要だと答えた項目は，「困っている人に役立つ」「地域社会の問題を解決」である。また，日本の独自項目で女子学生が重要だと答えた項目は，「生きたい人生を送る」「友人関係を大切にする」である。どちらも人間関係に関連する項目である。女子学生は，友人や地域社会での生活に関心をもち，人間関係の重視が期待される価値意識を社会化している。

最後に，「家族を養う」と「成熟した人生観をもつ」は，日米で男女差が逆転した項目である。「家族を養う」の原文は Raising family である。日本では，家族を扶養する経済

的側面が強く意識されたようだ。一方，アメリカでは，子育てなど養育的側面が強く意識されたようだ。

表 2.3.3　学生の自己評価

	日本 (JCSS2005)							アメリカ (CSS2004) 公立総合大学			
		国立大学			私立大学						
		男性	女性	差	男性	女性	差		男性	女性	差
学力	49%	68%	55%	-12	40%	33%	-7	73%	74%	72%	-2
協調性	47%	43%	43%	0	51%	51%	0	80%	79%	80%	2
競争心	44%	48%	42%	-6	48%	38%	-10	58%	71%	50%	-21
自己の理解	44%	44%	39%	-5	47%	44%	-3	64%	71%	60%	-11
やる気	44%	41%	39%	-2	48%	47%	-2	75%	76%	75%	0
体の健康	40%	38%	39%	1	43%	38%	-4	49%	60%	43%	-16
知的面での自信	37%	50%	37%	-13	38%	22%	-17	67%	75%	62%	-13
他者の理解	37%	33%	28%	-4	42%	43%	1	67%	65%	68%	3
創造性	34%	33%	24%	-9	39%	34%	-5	52%	53%	51%	-3
情緒面での安定度	33%	37%	24%	-12	40%	25%	-15	58%	64%	54%	-10
社交面での自信	32%	27%	23%	-4	37%	36%	-1	53%	58%	51%	-7
文章表現の能力	30%	29%	33%	4	31%	27%	-4	55%	53%	56%	3
リーダーシップ	27%	28%	22%	-6	33%	23%	-10	67%	74%	63%	-11
数理的な能力	26%	51%	22%	-29	17%	9%	-8	42%	53%	36%	-18
コンピュータの操作能力	22%	25%	15%	-11	25%	19%	-6	46%	61%	37%	-24
スピーチの能力	20%	19%	17%	-2	26%	15%	-11	44%	49%	41%	-8
人気	17%	18%	11%	-7	19%	15%	-4	37%	45%	32%	-12

注）問23より、同年齢の人たちと比べて「上位10%以上」と「平均以上」と答えた学生の割合。
四捨五入のため誤差がある。

３．自己評価の性的構造

日本の学生は,「学力」(49%),「協調性」(47%),「競争心」(44%)などについて自己の評価が高い。一方，アメリカの学生は,「協調性」(80%),「やる気」(75%),「学力」(73%)について自己の評価が高い。すべての項目で日本よりもアメリカの学生の方が，自己の評価が高い。それは，日米の社会で評価意識に違いがあるからであろう。日本は抑制的に，アメリカは促進的に自己評価する傾向がある（表○－３）。

さらに性差について，日米の学生を自己評価の項目ごとにみると，そこに共通する自己評価の性的構造が浮かび上がる。それらを，男子学生は「自己促進的評価」，女子学生は「自己抑制的評価」とする。

男子学生の自己促進的評価は，その地位達成的価値アイデンティティと整合している。一方，女子学生の方が高い自己評価の項目は，日米で４つしかない。それは,「協調性」「体の健康」「他者の理解」「文章表現の能力」である。その他の項目は，どれも女子学生の方が自己評価は低い。なかでも「競争心」「知的面での自信」「情緒面での安定度」「リーダーシップ」「数理的な能力」「コンピュータの操作能力」の性差が大きい。女子の自己抑制的評価は，その人間関係的価値アイデンティティと整合しているようだ。それは，高校では

履修科目や進路の選択に影響を与え，大学では専門分野に偏りをもたらしている。そして，「数理的な能力」と「コンピュータの操作能力」の低い自己評価をさらに強化する。

表 2.3.4　学生の葛藤と課外活動

	日本 (JCSS2005)							アメリカ (CSS2004) 公立総合大学			
		国立大学			私立大学						
		男性	女性	差	男性	女性	差		男性	女性	差
やるべきことの多さに圧倒された*	30%	24%	34%	9	27%	38%	11	40%	28%	47%	19
寂しくてホームシックになった	24%	18%	40%	22	20%	29%	9	61%	47%	70%	23
憂うつで落ち込んだ*	21%	15%	25%	10	19%	27%	8	8%	8%	9%	1
学外でアルバイトやパートで働く1)	80%	81%	87%	6	75%	83%	8	56%	52%	59%	7
美術館や博物館を訪れた	47%	48%	68%	21	35%	51%	16	54%	49%	57%	8
学内のスポーツに参加した2)	41%	45%	38%	-8	45%	32%	-13	62%	75%	54%	-22
ボランティア活動を行った	20%	15%	22%	7	18%	28%	10	76%	70%	79%	9
学内でアルバイトやパートで働く1)	11%	12%	15%	4	8%	10%	2	49%	44%	52%	8
個人的にカウンセリングを求めた	7%	4%	9%	5	7%	10%	3	16%	13%	18%	5

注) 問15より、「たびたびした」と「たまにした」と答えた学生の割合。四捨五入のため誤差がある。
1)は問6より。2) は問7より。＊印は「たびたびした」の割合だけ。

４．葛藤と課外活動

男子学生の地位達成的価値アイデンティティと自己促進的評価は，大学の業績原理や卒業後の進路選択に対して男性の役割期待を実現させるように働く。一方，女子学生の人間関係的価値アイデンティティと自己抑制的評価は，人間関係が重視される表出的な分野で有効性を発揮するかもしれないが，学生の役割期待と女性の役割期待にはズレがあり，それは葛藤を引き起こす契機になる。そして，女子学生にとって課外活動は，葛藤を処理する一つの手段である[8]。

表 2.3.1 で示したように，女子学生の方が大学での成績はよく，大学院への進学アスピレーションも高い。大学でのよい成績や高い進学意欲は，社会の学生に対する役割期待に女子学生がよく応えた結果である。しかし，女子学生の人間関係的価値アイデンティティと自己抑制的評価は，地位達成よりも人間関係を重視するから，男子学生の単純さとはことなり，大学の業績原理との両立が難しい。女子学生は，学生としての役割期待に応えるなかで，その性的役割期待との二重拘束に陥る。それで，日米とも女子学生の方が「やるべきことの多さに圧倒された」(34%；38%；47%)「寂しくてホームシックになった」(40%；29%；70%)「憂うつで落ち込んだ」(25%；27%；9%) と答えると推察される (表 2.3.4)。また，自己評価では「情緒面での安定度」(24%；25%；54%)の評価が低くなる(表 2.3.3)。

さらに表 2.3.4 から，日米の学生の課外活動を性差についてみると，日米とも課外活動は女子学生の方が活発である。スポーツだけは男子学生の方が多いが，アルバイト，ボランティア活動，美術館や博物館の訪問，そしてカウンセリングの利用は女子学生の方が多

い。アルバイトやボランティア活動は，女子学生の人間関係的価値アイデンティティを充足する。また，美術館や博物館の訪問は，教養的知識を拡充する。こうして課外活動は女子学生に葛藤を処理する機会を提供している。

表 2.3.5　学生の学習行動

	日本 (JCSS2005)							アメリカ (CSS2004)			
		国立大学			私立大学			公立総合大学			
		男性	女性	差	男性	女性	差		男性	女性	差
授業や約束に寝過ごしたりして行けなかった[1)]	76%	78%	75%	-3	77%	72%	-5	59%	64%	56%	-9
単位を取得できなかった授業があった[2)]	57%	75%	57%	-18	55%	38%	-16	29%	34%	26%	-8
授業に退屈した[*3)]	46%	51%	43%	-9	50%	39%	-11	38%	41%	35%	-6
提出期限までに宿題を完成できなかった	43%	59%	41%	-18	41%	28%	-13	67%	76%	61%	-15
アルバイトなど仕事で授業に出席できなかった	35%	36%	30%	-6	41%	30%	-12	23%	23%	24%	1
インターネットを使って授業課題を提出した	75%	79%	86%	7	68%	73%	5	93%	95%	92%	-3
研究や宿題のためにインターネットを使った[*]	71%	66%	76%	9	69%	79%	10	86%	82%	88%	6
インターネットを使って授業課題を受けた	49%	46%	51%	4	50%	49%	-1	97%	97%	96%	-1
大学教員とその自宅や飲食店で懇親会をもった	32%	26%	37%	12	33%	36%	3	32%	28%	34%	7
オフィスアワーなどに大学教員と面談した	13%	15%	20%	4	10%	11%	1	97%	97%	97%	0
他の学生と一緒に勉強した	86%	85%	93%	8	83%	87%	4	97%	98%	97%	-1
授業の内容について他の学生と議論した[*]	21%	20%	15%	-5	22%	24%	2	67%	62%	70%	7
他の学生に学習補助者(ﾁｭｰﾀｰ)として教えた	10%	10%	9%	-2	12%	7%	-5	52%	57%	49%	-8

注) 問7より、「たびたびした」と「たまにした」と答えた学生の割合。＊印は「たびたびした」の割合だけ。
1) は問15より。2) は問6より。3) 「授業をつまらなく感じた」を「授業に退屈した」へ行動の項目に変更。
四捨五入のため誤差がある。

５．学習行動

前節で，男子学生の地位達成的価値アイデンティティと自己促進的評価は，大学の業績原理に対して有効に働くと指摘した。しかし，学生のプロフィールでみたように，大学での成績は女子学生の方がよい。また，進学意欲も高い。それは，女子学生の方が学業に熱心だからである。女子学生は，男子学生より学生としての役割期待に応えている。

日米に共通する女子学生の学習行動は次のようである（表 2.3.5)。

まず，授業に対する消極的行動の項目は，ほとんど男子学生の方が多い。たとえば，「寝過ごした」「単位を取得できなかった」「退屈した」「提出期限を守れなかった」である。「アルバイトなどで授業に出席できなかった」は，日本では男子学生が多いが，アメリカではほとんど性差はない。アメリカの大学は出席が厳しそうである。

つぎに，インターネットを利用した学習では，「研究や宿題のためにインターネットを使った」学生は，女子学生の方が多い。学業に熱心な女子学生は，研究や宿題でもインターネットをよく利用している。

さらに，女子学生は大学教員との関係も良好である。課外で大学教員と懇親会をもった

り，オフィスアワーに面談したりする機会は，女子学生の方が多いか同じ程度である。隠れたカリキュラム論では，大学教員が女子学生を教室で男子学生よりも消極的に扱うことが指摘されている[9]。しかし，表 2.3.5 から，学習行動は，女子学生の方が積極的である。例外は，学習補助者（チューター）として教えたことがある学生である。性的要因が学習補助者の選抜に働いているかもしれない。

表 2.3.6　特別プログラムの履修

	日本 (JCSS2005)							アメリカ (CSS2004) 公立総合大学			
		国立大学			私立大学						
		男性	女性	差	男性	女性	差		男性	女性	差
学際的な授業を履修した*	32%	28%	41%	12	33%	31%	-2	49%	55%	46%	-9
自主的な学習プロジェクトに参加した*	25%	23%	24%	1	26%	26%	0	52%	60%	46%	-14
人権や民族に関する授業を履修した	24%	19%	34%	15	24%	26%	3	25%	20%	27%	7
女性学の授業を履修した	5%	3%	13%	10	3%	8%	5	10%	3%	14%	11
異文化理解のワークショップに参加した	4%	2%	4%	2	4%	6%	2	24%	20%	26%	7
海外研修プログラムに参加した	3%	1%	6%	4	2%	6%	4	13%	9%	16%	7
インターンシップのプログラムに参加した	3%	1%	4%	3	3%	4%	1	31%	31%	31%	1
学力不足を補う補習授業を履修した	2%	2%	3%	2	2%	2%	0	7%	8%	7%	-1
リーダー養成やキャリア開発の訓練に参加した	1%	1%	1%	0	1%	2%	1	26%	27%	26%	-2
休学や退学をした後に復学や再入学した	1%	1%	3%	2	1%	1%	0	10%	10%	10%	0
優秀な学生のために設けられた授業を履修した	1%	1%	2%	1	1%	1%	0	21%	22%	21%	-1
短期大学や他の4年制大学から編入した	1%	0%	1%	0	1%	2%	2	7%	7%	7%	0

注）問6より、経験した学生の割合。CSS2004における復学や再入学の「休学」と「退学」、編入の「短期大学」と「4年制大学」は、それぞれ2つを合計した値。*は問7より。

６．特別プログラムの履修

アメリカの大学では，研究者の養成や通常の教養教育だけでなく，多様な学生に対して特別プログラムを提供している。それらには，学力不足の学生ための補習授業もあるが，将来のリーダーを育成するプログラムもある。

表 2.3.6 は，日米の学生の特別プログラムの履修状況である。「学際的な授業」「自主的な学習プロジェクト」「人権や民族に関する授業」は，日本の学生でも４分の１程度が履修している。しかし，「女性学の授業」「異文化理解のワークショップ」「海外研修プログラム」「インターンシップ」「補習授業」「リーダー養成やキャリア開発訓練」「休学や一時退学の後に復学や再入学」「優秀学生のための授業」，そして「他大学からの編入」となると，日本の学生はほとんど履修や経験をしていない。

さらに日米の学生の履修状況について性差をみる。アメリカの女子学生は，「人権や民族に関する授業」や「女性学の授業」「異文化理解のワークショップ」「海外研修プログラム」を多く履修している。こうした特別プログラムでは，女子学生の人間関係的な価値アイデンティティが優位性を発揮するだろう。また，日本ではほとんど提供されていないが，「インターンシップ」や「リーダー養成やキャリア開発」「優秀な学生のための授業」は，男女

を問わず，アメリカの学生は履修している。

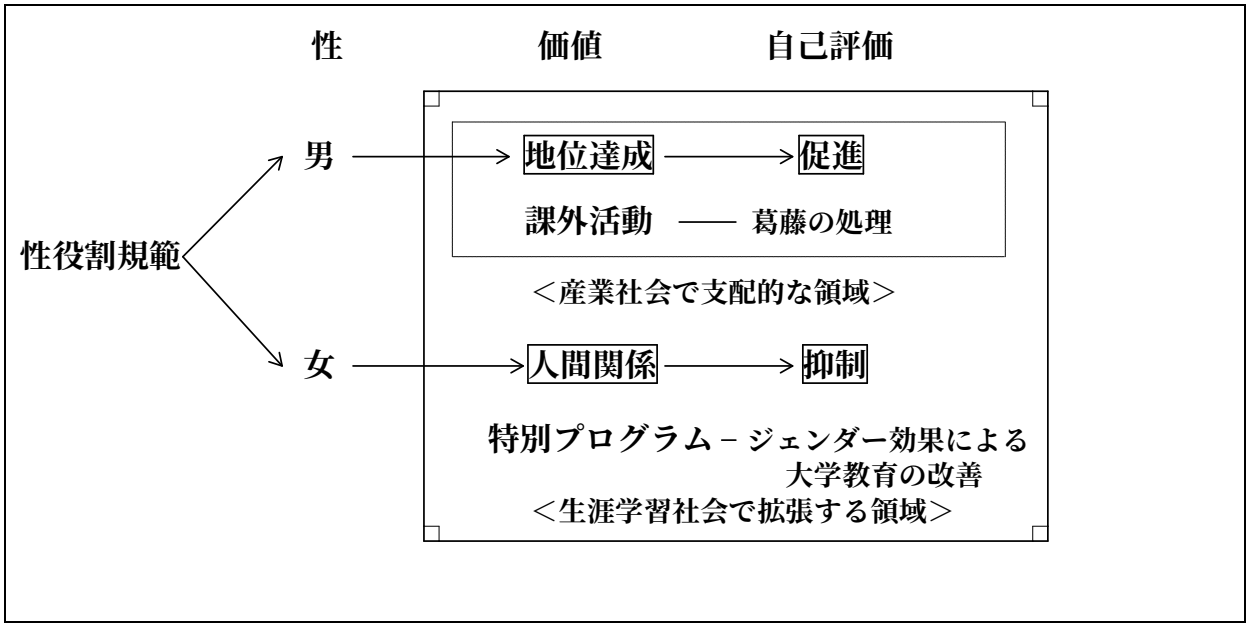
こうした多様な学生のための特別プログラムでは，従来の産業社会における近代的価値とはことなる女性の価値意識や評価の特性も正当に評価される。それは，ジェンダー効果による大学教育の改善の可能性であり，生涯学習社会に向かう大学のあり方を示すことになる。

おわりに

事前の予想とはことなり，女子学生は大学の成績もよく，進学意欲も高かった。事実，課外活動や学習行動で積極的であるのは，むしろ女子学生であった。しかし，男女には価値意識に明瞭な差異があり，自己評価に関しては男子学生の方が断然に高かった。本稿では，概念図式を設定して，以上の集計結果から得られた知見の説明をした（図○－１）。

社会の性別役割規範は，男女にそれぞれことなる価値意識や自己評価の特性をもたらしている。男性には地位達成的価値と自己促進的な評価であり，女性には人間関係的価値と自己抑制的な評価である。点線で囲む範囲は，産業社会の大学教育で支配的であった領域である。日本の大学教育は，女子のための高等教育は別として，男性の性別役割規範のラインで営まれてきた。そして，葛藤の処理には，たとえば課外活動があたってきた。生涯学習社会では，大学教育は実線で囲む範囲に領域を拡大する。その具体的事例として特別プログラムをあげられる。そこでは，性別役割規範のくびきから放たれた両性の価値意識と自己評価の統合が目指される。ジェンダー効果は大学教育の改善をもたらすのである。

図 2.3.1　概念図式



注

1　2005 年度の数値。『文部科学統計要覧』平成 18 年版,「就学率・進学率(2-2)」より。また,『学校基本調査』(速報)平成 18 年版,「調査結果の要旨」も参照した。
2　山本眞一(2006)を参照。
3　2004 年度の数値。*Digest of Education Statistics 2005*, Table 182(p.303)より。アメリカの統計資料は，他にも多く紹介されている。ホーン川嶋瑤子(2004)は付表８(p.304)で *Digest of Education Statistics* 2002 年版を引用している。また，平野貴子(1986)は *Projection of Education Statistics* を用いて学士取得者の男女別推移を示している(p.232)。
4　*The Condition of Education 2006*,(p.36)より。
5　『学校基本調査』(確定) 平成 18 年版,「11　関係学科別　学生数」を参照。なお,『学校基本調査』の各年版から，大江淳良(1992)は 1970 年から 1990 年の 30 年間の女子学生の割合の推移を検討している。
6　女子短期大学の考察は亀田温子(1986)を参照。池木清 (1991；1997)は，質問紙調査から実証的に女子短大を検討している。松井真知子 (1997)はエスノグラフィーの手法で短大内部の性別役割分業構造の再生産を描いている。矢野眞和(1986)は，社会経済的観点から女子高等教育の貨幣的・非貨幣的効果を検討している。
7　*Digest of Education Statistics 2005*, Table 262(p.456)より。
8　ここでは課外活動を葛藤処理の手段として論じた。吉田文(1992)は東京大学の学生生活調査から，女子学生の課外活動を文化資本論の観点から論じている。
9　教室での大学教員の女子学生に対する対応は，たとえばフォックス(1995)を参照。

参考文献

アスティン・ヘレン・S (1981).「女性と高等教育　―アメリカ合衆国における―」『IDE－現代の高等教育』民主教育協会,No.225,pp.53-63.

天野正子編 (1986).『女子高等教育の座標』垣内出版。

池木清 (1991).『女性の教育と職業』北樹出版。

池木清 (1997).『女子短大教育と卒業生の職業状況』北樹出版。

大江淳良 (1992).「女子学生台頭の現状」『IDE－現代の高等教育』民主教育協会，No.334, pp.48-52.

亀田温子 (1994).「アメリカの高等教育にみるフェミニゼーションの進行　－1980 年以後を中心に－」『大学論集』広島大学・大学教育研究センター,Vol.24,pp.135-155.

亀田温子 (1986).「女子短期大学 ―教育とセクシズム―」，天野正子編 『女子高等教育の座標』垣内出版,pp.119-139.

神田道子，亀田温子，浅見伸子，天野正子，西村由美子，山村直子，木村敬子・野口真代 (1985).「「女性と教育」研究の動向」『教育社会学研究』,Vol.40,pp.87-107.

武内清 (1985).「女子の生徒文化の特質」『教育社会学研究』,Vol.40,pp.23-34.

中西祐子 (1998).『ジェンダー・トラック：青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版社。

中西祐子・堀健志 (1997).「『ジェンダーと教育』研究の動向と課題　―教育社会学・ジェンダー・フェミニズム―」『教育社会学研究』,Vol.61,pp.77-100.

平野貴子(1986).「アメリカ女子高等教育の動向　―1970 年代以降を中心に―」，天野正子編 『女子高等教育の座標』垣内出版,pp.227-252.

フォックス・メアリー・フランク (1995).「女性と高等教育：学生と研究者におけるジェンダー差」『日米女性ジャーナル』,Vol.19,pp.3-20.

ホーン川嶋瑤子（2004).『大学教育とジェンダー ―ジェンダーはアメリカの大学をどう変革したか―』東信堂。
松井真知子（1997).『短大はどこへ行く　―ジェンダーと教育―』勁草書房。
山本眞一(2006).「進学率の再上昇と大学の役割変化―国民すべての知識基盤目指す」『アルカディア学報』No.259（『教育学術新聞』2248 号）。
＜http://www.shidaikyo.or.jp/riihe/research/arcadia/0259.html>
矢野眞和（1986）.「女子高等教育の社会・経済的効果」, 天野正子編 『女子高等教育の座標』垣内出版,pp.159-182.
吉田文　(1992).「東大のお嬢様はどこへ　―東大生生活実態調査より―」『IDE－現代の高等教育』民主教育協会,No.334,pp.53-59.